



堀川みどりの まちづくり



2017
SPRING
Vol.1



緑が少ない現在の堀川通

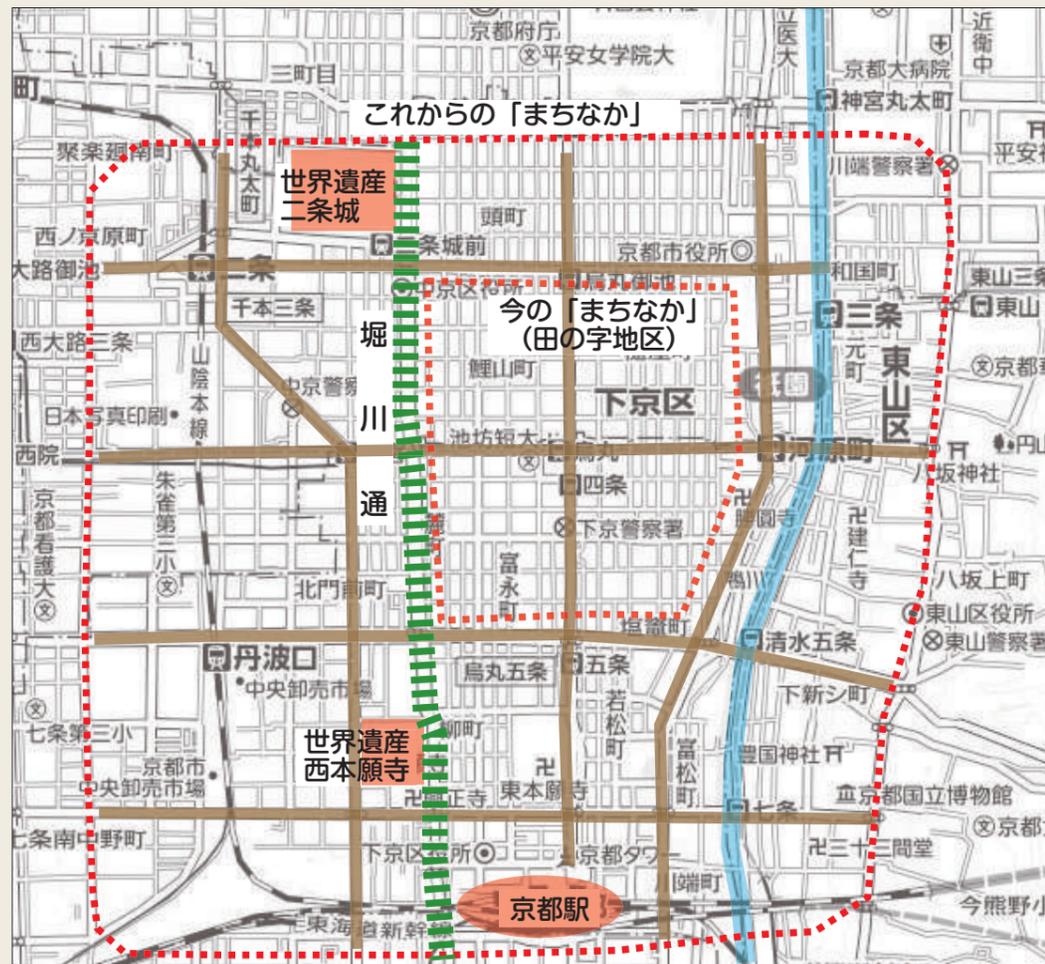
かつて堀川通は京都の都市域の中心に位置していましたが、幅員が広く交通量が多い、みどりが少ない現在の堀川通は、「町はずれ」のような景観となり、文化とにぎわいのある「まちなか（田の字地区）」の発展をさえぎっているように見えます。

堀川通が緑豊かな景観となれば、快適性が高まった、文化とにぎわいの中心軸となり、「まちなか」エリアは西へ南へと広がるでしょう。

※田の字地区とは：職住共存地区と幹線道路沿道地区からなる都心中心部で、都市活力の中心地です。



都市域の変遷と堀川通



堀川通が中心軸となることで、文化とにぎわいの「まちなか」エリアが広がる。

通りがまちをひろげる。



堀川通の建物疎開の様子が分かる空中写真 (1946年米軍撮影。出典：国土地理院ウェブサイト)

歩きたくなる「みどりの堀川通」

この冊子で取り上げる「堀川通」とは、主として御池通から七条通の区間です。

堀川通は平安時代の堀川開削に始まり、物流やものづくりの拠点となり、(後に世界遺産となる)西本願寺と二条城のある通りとして発展しました。

戦時中(1945年)には、空襲による火災の延焼を防ぐため沿道の建物が取り壊され、拡幅されました(建物疎開)。

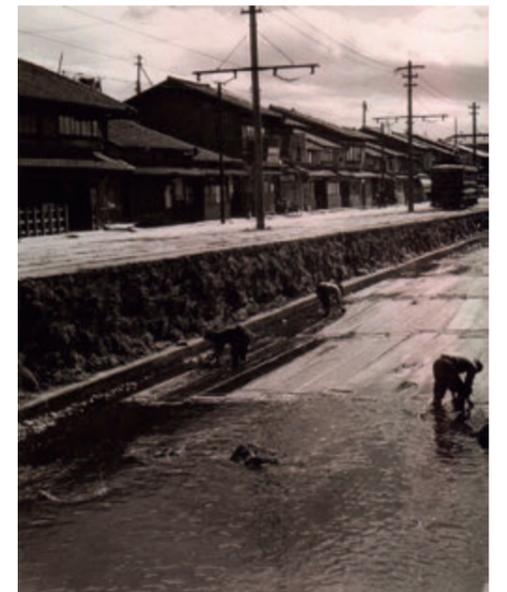
さらに戦後の1980年代に川が埋立てられて、通りは幅50mの京都を代表する大通りとなったものの、広い幅員に見合った豊かな緑がなく、景観やにぎわいがおろそかにされ、あまり魅力のない大通りとなってしまいました。

堀川通の景観は、戦中・戦後の混乱から、未だに回復していない状態と言えましょう。

御池通シンボルロード、堀川水辺環境整備、二条城東側空間整備など周辺の景観が改善される中で、堀川通の目指す方向が問われています。

私たちは京都市中京区が進める区民が主役のまちづくりの場「中京マチビト Café」で出会い、歩きたくなる「みどりの堀川通」のあり方を考え提案するプロジェクトを始めました。

2017年3月
堀川みどりのまちづくり会
NPO 法人京都景観フォーラム



堀川で友禅染の板を洗う風景。東堀川通に市電が走っている。(1954)(出典：広報誌「なかがょう」)



堀川と材木店（『洛中洛外図屏風 舟木本』）



昭和16年 東堀川通を行く秋の祭礼行列（広報誌『なかぎょう』）



昭和20年 建物強制疎開（広報誌『なかぎょう』）

古代～近世

現在の堀川通は堀川を挟む二本の通りの西側「西堀川通」が戦後に拡幅されたもので、そのルーツは平安京の「堀川小路」です。

堀川は平安京造営の頃に開削され、大内裏造営の資材運搬に用いられた運河の一つ「東堀川」と伝えられています。周辺に堀河院・高陽院・冷泉院などの貴顕が邸宅を構えましたが、中世に入ると材木業者が集まり、丹波・山城や土佐などから運ばれた木材を載せた筏が往来し、貯木場も設けられていました。当時の名残りは「丸太町」という名に残されています。

江戸時代には染色に好適な水質の伏流水に恵まれた地区ゆえに染色業が盛んになりました。染料を洗い流す作業のために堀川の流れが彩られる、という風景は昭和40年代まで見られたものです。

近代～現代

1892年（明治25）には東堀川通（四条～中立売）に線路が敷かれ、京都電気鉄道の北野線が開通。1918年（大正7）には京都市営になり、1961年（昭和36）7月に廃止されるまで、小柄なN型車体は市民の足として活躍しました。

終戦に近い1945年（昭和20）3月、空襲の際の防火対策として堀川通西側の建物が強制的に撤去され、その跡地は終戦後しばらく放置されていましたが、やがて市街地整備計画により道路拡幅の用地に充てられました。



堀川と東市・平安時代のイメージ（『京都千二百年（上）』イラスト穂積和夫）

参考文献

- 『新撰京都名所図會』武村俊則 白川書院（1961）
- 『京都の大路小路』千宗室・森谷尅久 小学館（1984）
- 『京都市電が走った街今昔』沖中忠順・福田静二 JTB（2000）
- 『京都』林屋辰三郎 岩波新書（1962）

堀川の暗渠化

1960年代には市内の下水道整備により堀川の水量が激減。加えて汚水・増水時の浸水対策や自動車増加などの問題から、1980年代中期に御池～七条間の堀川は暗渠化され、再び道路が拡幅されました。街路樹が植栽された幅50mの道路の両側に高層ビルがそびえ、五条通の交差点では歩道橋が四方を囲み、観光客を乗せた大型バスが各地から西本願寺・二条城へと行き交う……という現在の姿に至っています。

今出川通～押小路通間と西本願寺前は、堀川の形状が良く残されています。近年、水辺の景観を評価する声の高まりを受けて、押小路以北の川底が遊歩道として整備され、花見や七夕のイベントが催されるなど、都心の憩いの場として親しまれています。（辻野）



現在の二条城と堀川通



昭和36年 珍しい2両連結のチンチン電車（広報誌『なかぎょう』）



堀川二条を走る電車。京都国際ホテルが建設中（広報誌『なかぎょう』）



二条城と堀川通（『洛中洛外図屏風 歴博D本』）



大入商店前の市電の停留所「堀川蛸薬師」



往時の思い出を語る平野さん

堀川蛸薬師で半纏など印入り染物の製造卸会社を営む平野さんは、子どもの頃から堀川通周辺の変遷を見てきた証人だ。暗渠化や道路拡幅で大きく姿を変える前、今となっては想像しがたい往年の写真を前に、思い出を伺った。

流れる水の色で流行色がわかる？

この通りは、戦時中の建物疎開で激しく変わったんじゃないかな、と思います。西堀川は広くなって市電がなくなり、歩道やグリーンベルトができて、堀川を暗渠化してしまった。

三条堀川から終戦後に今の場所に来ました。うちの親父はここ（堀川蛸薬師）に移って、泣いていました。なぜなら三条堀川の商店街は華やかだったのに、ここは寂れて、川しか何もない。今は京都では有数の通りになっていますから、時の流れですわね。ここには染屋さんは多くあり、堀川で友禅の板にこびり付いた染料を洗っていました。それで今年の流行りの色がわかった。染屋を舞台に「夜の河」という小説が生まれ、映画にもなりました*。

大雨が降ると床上浸水

堀川は水が30～40cmしかなかった。ところが、ちょっと雨が降ると溢れる。うちの家でも床上浸水で畳も水に浸かったことがありました。戦時中は、



四条堀川の市電の停留所。堀川にかかるゲートのようなものは火災時に水をせき止め、放水用の水とした。

堀川をせき止めるゲートがあり、いざという時には放水できるようにしてあったんです。

川の底に土管が埋めてあり、いざという時は消防のホースで水を引く。それが各町内に一つずつあり、ここにドジョウやウナギがいました。杭にゴモクが引かかるので、食い意地の汚い人を「堀川のゴモク」（食いかかる）と呼びました（笑）。子どもの水遊びの場でしたし、野球のボールが流れてくると網ですくって、洗って、三条の公園へ売りに行った（笑）。

御池から上にはまだ昔の名残を残していますが、考えてみれば、市電が今も走っていたら観光名物でしょうなあ。京都の街の、昔の景色の良さを残そうという考えが途中で薄れたんじゃないかな。

緑がまちづくりのヒント！

堀川には思い出がありますが、暗渠にして、広い道にしてよかった、というのが実感ですね。京都の将来のことを考えると、瓦葺の木造住宅を残すことに収斂していくと、高層にできないから、難しい部分が出てくるんじゃないか。地元の人が堀川通で商売をするのが難しくなって、いずれ田の字地区は資産運用のための街になるんじゃないか。

美しい街をつくるのは「緑」、そんなところにヒントがあるのでは。



北野線廃止の記念乗車券。



* 沢野久雄原作、吉村公三郎監督、山本富士子・上原謙主演
1961年大映作品



市電と堀川のヤナギ並木



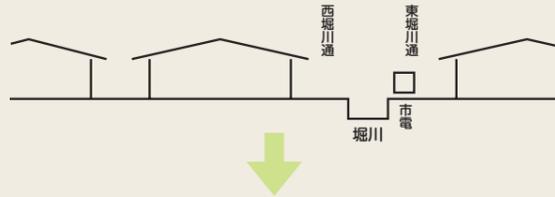
毎年、元旦は町内会で里帰り中の子ども、孫世代も集まり、にぎやかに新年を祝います。

堀川通の景観の変遷

建物疎開の後、拡幅された西堀川通にヤナギ並木が植えられ、チンチン電車と水辺のみどりの景観がなつかしい堀川通の思い出となりました。

1980年代の堀川の埋立が通りの景観を大きく変えました。50mに拡幅され、交通量が多く緑の少ない道路景観からは、親しめる居心地のいい印象は生まれません。一部の植栽帯には、ささやかな個性のある沿道の住民の園芸活動が見られます。

フェーズ1 建物疎開以前



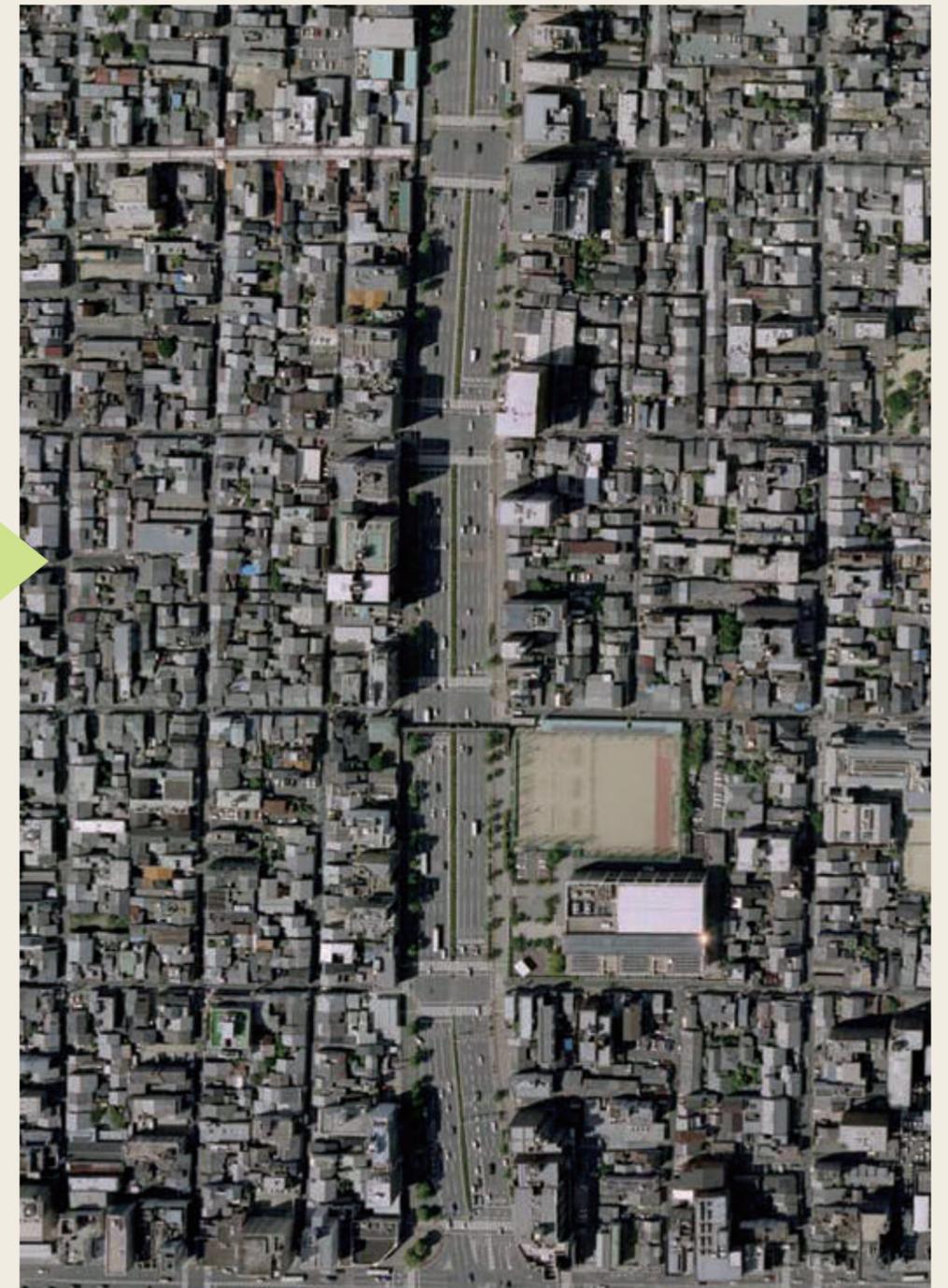
フェーズ2 建物疎開以後



フェーズ3 堀川埋立以後



フェーズ2 1982年の堀川通。堀川とヤナギ並木が見える。
(出典：国土地理院ウェブサイト)



フェーズ3 2008年の堀川通。(出典：国土地理院ウェブサイト)



フェーズ2 堀川埋立て以前。左側にヤナギ並木が見える。
1960年ごろ、堀川四条。



フェーズ3 現在の堀川通の景観。



一部の植樹帯では沿道の住民が植樹をしている。



地上機器（電気設備）を隠すプランター植栽。

堀川みどりのまちづくり Café

イベントの開催



堀川みどりのまちづくり Café

参加費 無料

2017.1.18 (水)
18:00-20:30

中区役所4階会議室 (詳細はこちら)

お話しからイメージをスケッチを描き残します。

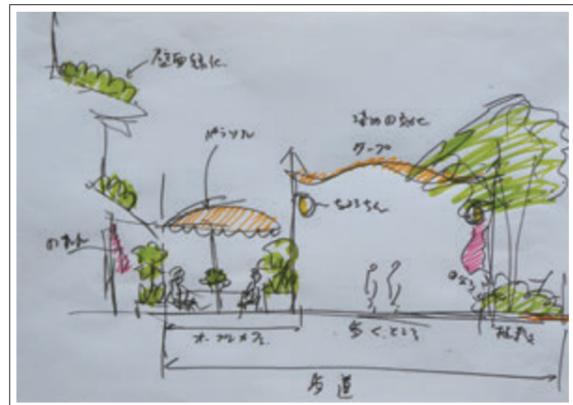
河合嗣生 (コウヘニシ) さん
造園家 (登録ランドスケープアーキテクト)
環境カウンセラー (環境省)
「市民参加型まちづくり」と「自然生態に学ぶ」を計画コンセプトに活動、里山再生・森遊び活動を滋賀県東、他にて継続。
その他、西の湖・蛇巢川いきもの観察の会主宰、近江兄弟社小学校社会人講師、京都御苑・自然教室講師 (野鳥担当)

堀川みどりのまちづくり会は、「歩きたくなる堀川通」をテーマに緑と景観を考える活動を行っています。

2016年春から定例ミーティング、界わいを歩いて現状を知る活動を進め、地域の方々や緑化に詳しい方、関心のある方を対象に、2017年1月18日中区役所会議室でワークショップイベント「堀川みどりのまちづくりCafé」を開催しました。

地域の緑化活動や管理、町づくりの運営に携わっている様々な方々にご来場いただき、堀川通の過去から現在の変遷や現在の問題点、国内外での緑化事例を話し合い、街路の緑化に関わっておられる方からは都市部における維持管理など様々な視点・経験からの貴重な意見も出されました。

ワークショップでは、堀川通の断面図を基に、参加者がテーマごとに色分けされたポストイットにこうあって欲しい通りのイメージを書き込み、今回のコーディネーターにお招きした造園家の河合嗣生さんにスケッチで表現していただきました。



各テーマの意見・アイデア (一部抜粋)

①緑化のアイデア

鳥が好む木 (実) 実のなる木 食べられる木
食べられない木 野菜づくり 宿根草
高層マンションのベランダに植木
葉っぱで遊ぶイベント 壁面緑化
自転車道と歩道間に緑地帯

②舗装材・道のデザイン

広場 フラワーポット
移動カフェができるスペース マルシェ開催
土の道 石畳 水はけのよい砂利道
自転車道と歩道の完全分離
アート作品 ベンチ

③水のアイデア

水琴窟 せせらぎ 小川 ビオトープ
水やりが自在にできる散水栓 バードバス
水力発電 噴水 手洗いできる設備

④これはどうかな? という提案

市電復活 わかりやすい通り名の看板
駐輪スペースの確保

このように、歩きたくなる堀川通のために必要なもの、改善して欲しいことやあれば楽しいものなどたくさんのアイデア・意見が集まりました。



河合さんによるまとめ

- ・木陰を感じられる並木
- ・大きすぎない樹林
- ・休息ベンチ
- ・腰高にして手元で管理できる菜園・花壇
- ・自転車道 (駐輪所併設) と歩道の分離
- ・雨水浸透利用のビオトープ→在来種の生息地

通りを良くするには緑を植えるという漠然とした目的ではなく、各自の思いや考えを具体的なイメージで出し、意見交換しながら確認することの大切さをこのワークショップで学ぶことができました。

カフェ後半では、参加者間で緑化活動と経験を話し合い、堀川通近くにお住いの眞田さんは、長く関わってきた街路緑化のボランティアの経験から、「苦労もあるがますます楽しく取り組めるか」「花壇用の水やり用水栓の必要性」など、京都市都市緑化協会の佐藤さんは「フタバアオイやフジバカマなど原種が自生地の環境変化で育ちにくくなり、絶滅前に都市で育成して緑化につなげたい」、他にも「洛西ニュータウンでは通りごとに違う種の街路樹を植えた」などの意見が出されました。

様々なお話から、緑を活かした通りのためには、



今回のコーディネーター

河合嗣生 さん

かわいづくお
造園家 (登録ランドスケープアーキテクト)
環境カウンセラー (環境省)
「市民参加型まちづくり」と「自然生態に学ぶ」を計画コンセプトに活動、里山再生・森遊び活動を滋賀県東、他にて継続。
その他、西の湖・蛇巢川いきもの観察の会主宰、近江兄弟社小学校社会人講師、京都御苑・自然教室講師 (野鳥担当)

住み暮らし利用する人々が意識を向け積極的に維持に関わることが必要だと感じました。

これからも、よりよい堀川通になるよう様々な提案・活動をしていきます。(柴田)



堀川通の現状（シミュレーションの元画像）

- 緑によって通り景観は大きく変わります。
- 街並みが目に優しくなじみ、落ち着いた場所や居場所が生まれます。
- 歩きたくるだけでなく、カフェに座ってまちを眺めたりおしゃべりをしようという心のゆとりが生まれます。

シカゴ大学の研究チームは「街路樹が1街区当たり10本増えると健康状態の自己評価が向上し、1世帯当たりの年収が平均1万ドル増加、あるいは7歳若返るのに相当する」という研究を発表しています。（ニュースウィーク日本版2015年8月25日号）

京都駅から4キロの区間の堀川通には2つの世界遺産（西本願寺・二条城）がありますが、魅力ある緑の景観が散りばめられる事で、世界の人が憧れる都大路になるでしょう。

【シミュレーションの参考とした事例】

東京の表参道（図1）、仙台の定禅寺通、大阪の御堂筋、京都の御池通などでは、緑豊かな街路が都市のシンボルとなっています。

また、近年の緑化技術の向上により屋上やバルコニーや壁面などを緑で覆い、地域のランドマークとなった事例も見られます。（図2、3、4）

小さな歩道空間でも、手入れの行き届いたみずみずしい緑の居場所を維持することができます。潤い、落ち着き、個性のある街角が生まれ、訪れたい、歩いて飽きない通となります。（図5、6）

パークレットは、サンフランシスコで始まった、車道を人の居場所に転換する試みで、道路が占める面積は大きいにも関わらず、豊かな生活の場になっていないという反省から生まれ、店舗や沿道住民組織の出資で設置されます。（図7）

2016年に神戸市でも実験的に実施されました。



図1 表参道（東京都渋谷区）



図2 階段状の屋上緑化（アクロス福岡／福岡市）



図3 日本最大級の壁面緑化（京都ヨドバシ／京都市）



図4 「垂直の森（Bosco Verticale）」（ミラノの高層アパート）



図5 永康街の店舗（台北市大安区）



図6 南青山の歩道（東京都港区）

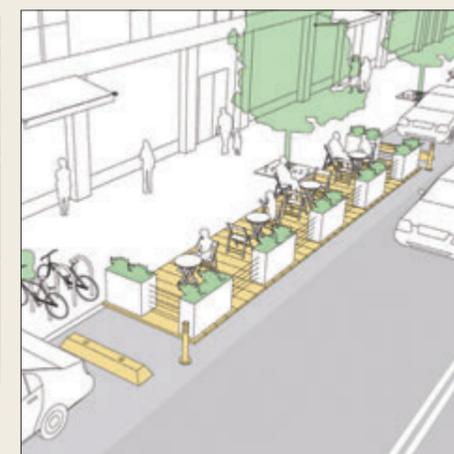


図7 パークレットのイメージ

参考・引用資料
Stefano Boeri Architetti（建築事務所）のサイト
National Association of City Transportation Officials（非営利活動団体）のサイト



木曜早朝開催の「あさっぱちカフェ」

活動は平成6年から始めました。

「中京まちびとカフェ」で屋上緑化ボランティアを募集していて、参加したんです。ボランティアは現在18名。男性が多いです。イベントでのアピールを通じて参加した人が多いですが、緑が好きな人でないと続かないと思いますね。

作業は週に2回、朝9時から11時まで。たいへんなのは夏の水やり。自動灌水できるようにしたけれど。

区役所職員でも、屋上でこんなことをやっている知らない人が多いです。

●みつばちガーデン

ミツバチを飼い始めたのは5年前からで、当時の区長が提案したものです。採蜜見学会やハチミツのテイastingなどで認知度は上がったと思います。採ったハチミツはテイastingしたり、授産施設に供給したりしています。

年間行事は、5月下旬にお茶会。6～7月は高倉小学校の3～4年生に、屋上や学校へ出張して園芸教室をやっています。9月には屋上で採蜜見学会。10月の「中京ふれあいまつり」で僕らの活動をアピールします。11月はデイケアセンターで講習会。他にも学校に呼ばれたり、地域力推進室と園芸教室

をしたり、新京極の六角公園の運営管理をやるのも主な活動です。売り上げで運営費を捻出しています。

●堀川通の緑化について

緑化推進で街がきれいになったら、ゴミがほかせないから、キレイになっていくと思います。堀川通もそうあってほしい。

街路樹の水をどこから供給するか？ 街路の植え込みに散水栓がないと。何ヶ所か設けてほしいと思いますね。雨水を利用したりするとエコを兼ねてできるし。

樹は手入れの簡単な樹で、プラタナスがいい。ケヤキでもいいけど、毛虫が出る(笑)。果物が獲れる樹が植えられないかな。

中京区の緑覆率は9.5%くらい、下京区に次いで低いんです。緑化推進は「どうすればいいか？」ではなく、「どうしたいか？」と考えることです。ヒートアイランド対策のために緑化していく、とか。堀川通は外人も国賓も通るし、スカッとした景観にしたいですね。



笑顔の西村さんと活動を紹介した『みつばちガーデン』の冊子



採蜜見学会の様子



中京区役所屋上庭園の維持管理活動について

西村 勇さん (中京花とみどりの会 会長)

緑地のいきものたち

眞田幹雄さん・博子さん

都心の幹線道路、御池通の歩道脇の小さな緑地にも、さまざまな生物の息吹きがある。ボランティアとして御池通の「緑地サポーター」を務める眞田さんご夫妻の目には、草木や昆虫を観察するフィールドでもあるようだ。

道幅50mの御池通は祇園祭の赤とケヤキ並木の緑が特に印象深い。自宅前の街路樹サポーターからスタートし、永い年月が流れ、思い出すことは数多い。

現在私たちが見守る範囲では、樹木はキンモクセイ、フヨウなど9種、草木はなるべく在来種をとヒオウギ、ニホンスイセンなど植えてみたが、土との相性、外来種の勢いに押され気味である。ただ、自然に芽生えた草にも生き物は集まり、ヒメジョオンは虫たちのお気に入り。カタバミからはヤマトシジミが必ず発生し、スマレは食い尽くされてもツマグロヒョウモン幼虫の赤黒の縞模様に笑みも浮かぶ。蝶の食卓を意識して植えたせいか、アオスジアゲハも羽化し、スジグロシロチョウも飛来。25種を確認、蛾は6種でウンモンズメは年2回発生し、羽化直後の色柄は見事である。バッタ3種、トンボ6種、ナガコガネグモの網を揺らしての威嚇、アシナガバチの巣、カマキリの卵のう、ケヤキが好きクマゼミの大量発生など本当に賑やかである。

メジロ、エナガなどは常連さん、ときどきツグミが姿を見せ10種を超えた。

街の真中の、ほんの少しの緑地にも多種多様な生き物が生息し、何とも愛おしい。

だが現状は、毎度の水やり、大量の落葉、ゴミの投げ捨て、犬の糞尿、イタズラなど、心が折れることもあり、すべてが万歳とはいかない。

世話人もいつしか今は二人。その私たちも引越、近いので時間を見つけて足を運ぶが、気になる所も多く後ろ髪を引かれる思いでいる。

ご近所さんにはもちろん、通りがかりの人からの声掛けは何よりの励ましとなり、学校帰りの子供たちとの会話はいい刺激にもなる。些少の知識でもできる限り正確に伝えたい思いで、調べ直して新たな発見ができるのはありがたい。

ボランティアとしての限界を感じる時もあるが、人との出会いも含め、心の安らぎや季節ごとの変化を楽しめる幸せ、これらがしんどさを超えての長続きの元と思い、御池花壇とのおつきあいは今も続いている。



アオスジアゲハ
シャリンバイの花で吸蜜中 幼虫はクスノキの葉を食べる
植樹帯で自然に生えたクスノキで幼虫を観察している



スジグロシロチョウ
林縁や溪流沿いに生息するが、都会に生える野草、イヌガラシやタネツケバナを幼虫が食べて繁殖している。都会で観察することは珍しい



ウンモンズメの交尾
幼虫はケヤキの葉を食べる。植樹帯で毎年発生



ヤマトシジミ ♂
幼虫はカタバミの葉を食べる。植樹帯で毎年発生



ツコムシ
チトニアの花を食べている。植樹帯で発生 幼虫も観察している



ツマグロヒョウモン ♀
百日草の花に吸蜜のため飛来、スマレの葉を食べて繁殖している



眞田さんご夫妻

御池通植樹帯に飛来、発生した昆虫の記録写真 (御池通新町西入 付近) 眞田幹雄撮影

堀川の本隣の通りに 住んで営んで。

浜谷富美子さん

すみびと
エッセイ
ESSAY

11年前、兵庫県から岩上通（堀川通の1本西）に移り住みました。

古い木の家に住んでみたいと思っていて、兵庫はもとより、大阪、奈良などを探していたところ、京都の町家に巡り会い、現在、楽しく暮らしています。それまで京都には縁がなく、初めての土地で不安だったのですが、ご近所の方はとてもよくしてくれて、不安はすぐに吹き飛びました。

お千度、地藏盆、運動会、懇親会と町内のイベントが多くて、皆さんと顔を合わせる機会が多いことにビックリしたのですが、それが住み心地のよさにつながっていると思います。数年前に、地藏盆のお飾りを自宅でさせていただいたときには、「町内の一員になったな～！京都人になったな～！」とちょっと誇らしく思ったものです。

2年前に町家の「ミセの間（通り側の部屋）」を店にしたので、今は職住一致の生活です。本来の「町家のすまい方」ですね。

店は小さいですが、訪れる方がそれぞれの「楽しいすまい方」を発見してもらえるように、日本に昔からある生活道具や家で使えるキャンプ道具、キッチン便利グッズなど普段はちょっと見かけない生活雑貨を販売しています。シュロの束子やほうき、竹のザル、土鍋、ダッチオーブン等、それらのよさや使い方を教えていただくために、料理教室や掃除体験等様々なイベントも開催していて、ご近所の方はもちろん、遠くからのお客様も来られるようになりました。

今の堀川通は、車のための道路のような印象が強いですが、通りを少し東西に入れば、ビックリするくらい静かですし、まだまだ昔ながらの町並みが残っています。歩道も広い堀川通が歩く人にとって楽しい通りになるとこの辺りもまた新しい賑わいが訪れるのではないかと期待しています。



木造の家特有の空気が流れる穏やかな空間が好きと語る浜谷さん。



商品は浜谷さんが実際に使用し、使い心地の良さを確認したものを販売している。



設計の仕事を経て、家族と住み始めた古い町家。家からつながった縁で活動が広がり、暮らしの道具を扱う店を開く。

すまいの雑貨店 sumao
<http://sumao.info>

タッタタッ！と軽やかに二階の工場へと駆け上る職人さんの足音が聞こえ、辺りは色止めのための蒸し器の蒸気でくもり、染料が練りこまれた米糊の決して良い香りだとは言い難い独特の香りがいつも漂う。表の店の間では常に人の出入りがあり「毎度おおきに！」の声が途切れることがない。昭和40年生まれの方はそんな型染めの友禅工場で育ちました。

幼い頃、私はとても自由に育てられたかと思うのですが、唯一、工場への出入りは固く禁じられていました。子どもがふざけてお預かりしている白生地を染料で汚してしまう事を危惧していたのでしょうか。ただ、好奇心いっぱいだった私はそっと階段の下から職人さんの仕事を見るのが大好きでした。リズムカルでいながら正確な動きの刷毛捌きや、一反の着物を染めるために何度も伊勢型を送る動作、突き針をさっと口にくわえる仕草は、私に時を忘れさせました。そして、時々そんな私に気づいた職人さんは昔話を語ってくれたのです。

堀川で反物を水洗した事や、反物を張った13mの板を洗った事。そして何より川に浮かぶその板の上を大道芸の様に入り抜けた事を現在の事のように話してくれるのをワクワクしながら聞いたものでした。

このように祖父や両親、番頭さんや職人さん、お手伝いのお姉さん等、にぎやかで大勢の家族の中で子ども時代を過ごした私は、現在、手染めの本麻を



茶道や着物を通して知った和の良さを、京都の美しさとあわせて商品とともに伝えていきたいと語る渡辺さん。麻生地の色も決めて手染め加工をしている。

麻 和雑貨「京都錦小路 あぶに一る」
<https://avenir-kyoto.stores.jp/>



販売している商品はすべて渡辺さんがデザインし縫製まで手掛けているオリジナル。

使い、バッグやポーチ等を製作・販売する和雑貨の店を営んでおります。染めの美しさを皆さんに少しでも知って頂きたい！と両親亡き後生家を改装し店づくりをしました。古い町家の改装は想像以上に大変で、電気の配線をやり直したり、天井を補強したり、途中、床を取り除いた際には大人三人は入れそうな大きな防空壕が出現したりと驚く事もありましたが、平成26年のオープンの日から皆さまにお支え頂き、5月には3周年を迎える事となりました。祖父の時代から続く「楠本忠染工」は時代と共に名を「麻 和雑貨 京都錦小路 あぶに一る」と変え、姿も変わりましたが、私の心には常に生地を愛し、染めに拘る強い思いがこれからも受け継がれていきます。店名の「あぶに一る AVENIR」はフランス語で「未来を意味します。伝統ある染めの技術が絶えてしまわない様に、繊細な手仕事の美しさを未来に残せる様に願うと共に、二つの世界遺産を繋ぐ堀川通を軸に、活気あふれる町づくりの「未来」への期待がますます高まってゆくのですね。



お父さんが作成された伊勢型小紋の色見本。柄行や配色を考え取り組まれていたのを幼い頃から傍らで見ていた。

「染めの町 今・昔そして未来」

渡辺敦子さん

すみびと
エッセイ
ESSAY

1 「都市の生物多様性」

生物多様性とは、すべての生物の間に違いがあることであり、遺伝子、種、生態系の3つのレベルでの多様性があるとされています。1992年（平成4）の生物多様性条約の締結を契機として、生物多様性の保全に関する国際的な関心が高まり、日本を含む世界各国で様々な取組が進められています。その中では、世界人口の半数以上が居住する都市における生物多様性に対しても、注目が高まっています。なぜなら、都市住民による資源の消費は、都市内や都市の周辺のみならず、場合によっては他の国の生態系にまで影響を与える可能性があるため、都市住民が生物多様性の重要性を理解することが、都市だけでなく、地球全体の生物多様性の保全に重要であるからです。

都市の生物多様性は、都市住民に、大気浄化、レクリエーション、災害防止、豊かな地域文化など、様々な恩恵を提供しています。また、都市住民が身近な生物とふれあうことは、生物多様性の重要性を理解し、保全に向けた行動を起こしていくきっかけとしても重要です。



生物多様性の3つのレベル

2 「緑水歩廊」

「緑水歩廊」は2012年（平成24）8月、京都駅ビルに設置された「人工的湿地」の展示施設です。プランターを階段状に設置して里山・棚田・湿地・池沼という京の原風景（風土）を表現し、郷土種や絶滅危惧種を植栽しているのが大きな特色です。

「池沼」のエリアでは約70年前に干拓され消滅した巨椋池の土壌を持ち込み、発芽した水性植物を育てています。水道水、商業電源を使用せず、ビル内で調達できる雨水、地下水を重力やソーラーエネルギーを使って貯蓄、循環させる先進的な実験装置です。



池沼のエリアのプランター植栽



緑水歩廊に飛来したイソヒヨドリ



緑水歩廊の構成（京都駅ビル開発（株）未来委員会資料より）

参考引用文献
 「都市と生物多様性」国土交通省（2010）
 「京都市生物多様性プラン」京都市（2014）
 「京都市緑の基本計画」京都市（2010）
 「京都駅ビル『緑水歩廊』の取り組み」京都駅ビル開発株式会社（2014）
 公益財団法人 京都市都市緑化協会ホームページ



京都学園大学太秦キャンパスの雨庭

3 「雨庭」

雨庭とは地面や屋根に降った雨水を溜めるための、浅い窪地型の植栽空間です。その効果として、排水系統への雨水流出量を減少させることによる洪水の抑制や、その植栽での地域の生物多様性の向上などが挙げられます。米国や欧州等では雨庭の普及が進みつつあります。

4 「和の花」

公益財団法人京都市都市緑化協会などが、絶滅危惧種の郷土種「和の花」の栽培協力体制をつくり、栽培方法を普及し、広報や展示会を通じて生息環境の保全を訴えるなど、ネットワークづくりの取組を行っています。

フジバカマ、フタバアオイ、ヒオウギなどの和の花にまつわる暮らしの記憶や風土性を受け継ぎ、市民の支持を集めています。

今まで緑化材料として使われていなかった「和の花」を都市空間の中にも導入する試みが、市内各所で行われています。2016年（平成28）10月には、道路や境内など5会場でフジバカマの鉢植えを計約900鉢並べる「藤袴アベニューてらまち」が開催されました。会場にはフジバカマの蜜を求めてアサギマダラという蝶が飛来しました。



寺町通にやって来たアサギマダラ



寺町通に展示されたフジバカマ

5 「緑の軸」

京都市は2010年（平成22）に「緑の基本計画」を策定しました。基本方針③では「水と緑のネットワークづくり～生態系ネットワーク、風の道を創出する」とあり、緑の配置方針が示されています。

この「緑の配置方針」はすぐに事業化するというわけではないが、各地でその都度起こる開発プロジェクトや市民活動を方向付けて、長期間をかけて実現すべき目標です。

その中で堀川通と御池通が、京都盆地の中心軸となる、東西の太い「緑の軸」となっていることが注目されます



【堀川通＝生きものの通り道 ～生物多様性を生み出すまちづくり】

多くの野鳥が、北山から上賀茂神社・下鴨神社・鴨川を経て、東山から吉田山、南禅寺を琵琶湖疏水・鴨川を経て京都御苑にやってきます。加えて市街地に歴史的な寺社が位置することも地域固有の生態系・生物多様性を支えています。

住宅の庭の「小自然」、樹々の豊かな公園緑地や庭園の「中自然」。さらに北山の「大自然」です。野鳥達はエサを求めてこの「大自然・中自然・小自然」を行き来していることとなります。

南北方向の鴨川、東西方向の街路樹の豊かな御池通りに加え、新たに堀川通りのみどり環境が充実すれば、二条城から西本願寺を結ぶ「みどりの回廊」となり、京都の魅力となることは間違いありません。

（ランドスケープアーキテクト 河合嗣生さんのコメント）

参加
無料

堀川みどりの まちづくり Café

造園家の河合嗣生さんが皆さんの
お話からイメージスケッチを描き起します。

2017.1.18 (水)
18:00-20:30
中京区役所4階会議室 (堀川御地下ル)

堀川は2つの世界遺産(西本願寺・二条城)をつなぐ道、
京都の顔になるべき都大路です。
堀川沿をもっと楽しく美しくする、
歩きたくなる「みどりのまちづくり」を考えましょう。
堀川通りわいで緑を育てている人、
育てたいと思っている人が集まって夢を語り合い、
未来の姿を描くCaféをオープンします。

河合嗣生 (カワイツグオ)
造園家(登録ランドスケープアーキテクト)
環境デザインセンター(副所長)
【市民参加型まちづくり】「自然生態に学ぶ」を
計画コンセプトに活動。
堀川再生(京都府立総合造園専門学校、他)にて継続。
そのほか、京都府のまちづくり推進委員、
近江兄弟社小学校社会人講師
京都府立自然教室講師(野鳥担当)

主催 堀川みどりのまちづくり会-NPO法人京都景観フォーラム
連絡先 中村 kanosato2013@gmail.com

この催しは、京都府(地域力再生プロジェクト支援事業)、都市環境デザイン会議(公募型プロジェクト助成金、本部ならびに関西ブロック)、
外都府会、京都府立総合造園専門学校、中京区(まちづくり支援事業マヒト応援枠)のご支援をいただいております。

堀川みどりのまちづくり会・NPO 法人京都景観フォーラム

連絡先 kanosato2013@gmail.com (中村)

柴田晴美* 重藤将宣 開発比差子 辻野隆雄* 中村伸之* 松石敏治 平野雅左夫 浜谷富美子 渡辺敦子
(*印 パンフレット制作スタッフ)

協力：河合嗣生 小林明音 デザイン：KOTO DESIGN Inc.

京都府(地域力再生プロジェクト支援事業)、都市環境デザイン会議(公募型プロジェクト助成金、本部ならびに関西ブロック)、
中京区(まちづくり支援事業マヒト応援枠)のご支援をいただいております。